



TITLE:

上島先生を憶ふ

AUTHOR(S):

小山, 秋雄

---

CITATION:

小山, 秋雄. 上島先生を憶ふ. 天界 1936, 16(180): 210-211

ISSUE DATE:

1936-03-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167199>

RIGHT:

## 上島先生を憶ふ

小山 秋雄

今日上島先生死去の報を受け取り呆然としてゐる。高等學校在學の頃、天體觀覽日の1夜、吉田の教室の赤煉瓦のドームを見學した時、一見18、9歳に見える、坊主蒔の紅顔の美少年が説明してゐた。仲々天文をよく知つてゐる給仕がゐると思つてゐたが、入學後あれが上島先生だつたと知つて驚いた事がある。大學へ入學した時、上島先生は丁度卒業せられ、又專攻の方面も異り、その上双方ともあまり人附合しない方なので、あまり親しくはしてゐなかつたが、近來になつて色々御指導を仰ぎ、益々敬慕の念を深くしてゐた次第である。

上島先生は、御專攻の太陽物理學のみならず、天體物理學の觀測方面にも仲々御造詣が深かつた。而かも、それが單なる机上の知識ではなく、色々實驗的な觀測を1通りやられたのであるから、仲々しつかりしてゐて、うつかり質問に行かうものなら、あまり深く答へられ、却つてこちらの豫備知識のないのに恥入るばかりであつた。特に寫眞測光、日食のプラン等で御厄介になり、當地に来てからは、上京する毎に、1度は熊々御目に掛つて色々御指導を仰いでゐた。此の様に天體物理學の觀測方面に詳しい方は外にはないと考へ、今後の唯一の指導者とまで心ひそかに思つてゐた次第である。

又、獨立獨行の精神が強く、太陽館に入つて行くと無細工な手細工の設備が澤山こしらへてあつた。當地に来て以來、何が上島先生にさうさせたかといふ事がよく解り、今の状態では何かやらうと思ふと、やはりその方針でやる外はないと悟り、自分もそれに倣はうとしてゐる譯である。

上島先生は、また自然科学者がやいもすると、知識階級の通性として、政治に無關心な態度を執るといふ様な事もなく、刻々生起する政治問題に對し、一見識を持つてゐられた事は、勿論小生と意見の相違はあつたが、小生の心頼して思つてゐた所である。

10年、20年の先かも知れないが、巨大な天體物理學の觀測所の出來た曉には是非上島先生の如き方を頭にいたゞきたいと思つてゐたのに拘らず、此の

訃報に接し、自分達の責任の大になつた事を感じるに先立ち、一入尊敬してゐた故人が偲ばれる。

もう御葬儀も一昨日にすんださうだし、遠くはなれてゐては故人に弔意の表はし様もない。又先月中旬上京した時、時間を繰合はし御見舞に行けばよかつたと悔いても致し方ない。此處に拙文を記し、故人の靈にさし上げる次第である。

(1936. 3月3日 於倉敷)

## 上島先生を憶ふ

荒木健児

去年の3月1日、倉敷から花山に移り、最初の仕事は氣象の觀測と太陽寫眞觀測とであつた。そのため、これまで殆んど交渉のなかつた上島先生の御指導を親しく受ける機會に恵まれた。

太陽物理學の權威者として、教室では天體物理學の講義も擔當され、若年にして講師にあげられ、その着實な研究的態度は既に將來の教授を約束するに十分であつたといはれてゐる。

一旦計畫したことはどこまでもやり通すといふ堅い御決心は、太陽觀測上にもあらはれ、さきに分光太陽鏡を自製され、又、空氣の動搖による太陽縁邊像の寫眞的調査の操作の如きは、1日數10枚の撮影に少しの疲勞の色も見せられず、もし、私が先生の助手であつたなら、私の方が先にくたばつてしまふであらう。先生のすさまじい御元氣には驚くほかなかつた。

しかし、これは一面、先生の生涯をあやまつた。病をおして2時間連續の講義を敢てせられては、1日の休養を1ヶ月に延長せねばならなかつたのである。

しづかに學問を楽しむ人であつたから、私達の間の話題に上るやうなことは殆んどなかつた。典型的の紳士であつた。

去年の春、空が曇つてゐる日、太陽館の暗室にとちこもつて居られたことがあつた。その時、私は先生が大聲で數年前に全國津々浦々まで征服した流行歌を歌はれるのを聞いた。この日は餘程お楽しさうであつた。現像された